

05・朝から甘えまくり励まし授乳クリいじりでイかせてもらう

トラック04の翌朝。

とある年の春。

五月十三日。六時半ごろ。

場所は主人公とシーラが宿泊中の、高級ホテルのベッドの上。

天気は晴れ。室温は二十四度程度。

主人公とシーラは、裸で抱き合ったまま眠っている。

〈主人公〉

「……………」

主人公、のそのそと目を覚ますと、しばらくぼんやりしたのち、また横になってシーラの寝顔を見つめる。

まだ起きたばかりだが、まだ起きたばかりだからこそ、シーラに甘えなくなってきたのだ。

『またか』『まだ飽き足らないのか』と言われそうだが、これには主人公なりの理由があ

る。

後数時間後には、二人はここを出て、普段の生活に戻る。

そうなたらきつと忙しくて、また自分こんな時間は過ごせないからだ。

昨夜、主人公とシーラは、あの後で一晩じゅう、思う存分愛し合った。

それはとても素晴らしい夜で、主人公は心身ともにとても満たされた。

この夜二人がしていたのが、あまり一般的なセックスと言えない点は少々問題ではあるが……それを差し引いても、完璧な時間であったといえるだろう。

だからこそ、主人公は思ってしまう。

あー……。もうずっとここにいたい。

もう頑張りたくない。もう何もしたくない。

何もかもの責任を捨てて、全部シーラにしてもらって、甘えたい。

何もしないダメなやつになりてえ……。

と。

だが当然、そんなわけにはいかない。

主人公はこれでもメイドたちの生活を守り、自分と世の中を良くしていくために尽力する経営者だ。

また、自分の仕事にやりがいを感じていて、好きだと思っている一社会人でもある。

逃げ出すわけにはいかないし、やめるわけにはいかない。

第一そんな事をしたら、生活が立ち行かないからだ。

確かに主人公は、メイドたちに『お嬢様』と呼ばれ、今もこんないいところに泊まっている。一見お嬢様かもしれない。

だが、実際はもうとつくにそうではない。

今日の宿泊だって、シーラを始めとするメイドたちが、一仕事終えた主人公に、たまには休んでくれと、みんなで用意してくれたものなのだ。

そんな彼女達の思いに報いるためにも、主人公は戦い続けなくてはならない。

そこでしまくったのがセックスというのは少々申し訳なくもあるが……それはメイドたちも想定内だろうからいいとして……とにかく。

とにかく、だから、主人公は『やる』。

それだけは、何があるうと、絶対に決まっている事だ。

〈主人公〉

「……………」

なので、主人公はシーラに甘える事にした。

『今言った事と話が違うじゃないか』と言われそうだが、もう少し詳しく説明すると、主人公は甘えてから、頑張る事にしたのだ。

具体的には、今から、あと一時間位。

朝食が運ばれてくる時間まで、シーラに甘えさせてもらって。  
それから、また一仕事する事にしたのだ。

SE1 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

という事で、主人公は活動を始めた。

再び起き上がり、まだ寝ている裸のシーラに、布団の中でそっと覆いかぶさる。  
ありていに言うと、シーラのおっぱいを吸いたいのだ。

朝からその胸に甘え倒して、重さと柔らかさをたっぷり確かめて、心身ともに癒された  
い。

そうすれば、単純な自分はきつととても元気になって、いつも以上のポテンシャルを発

揮して働く事ができるだろう。

そう思ったのだ。

それから、

そもそも、わたしがこんな事を考えるのは、もちろんシーラのせいなんだからね！

……とも、主人公は思っている。

昨日のシーラは相当攻めたいモードだったのか、ちっとも主人公にさせてくれなかった。その大きすぎるおっぱいだって、頭に、背中に、胸にめちやくちやに押し付けてきたくせに。その時乳首は、しょっちゅう、いや、ほぼ全ての瞬間において立っていたくせに……。

ほとんど触らせてもらう暇もないほど、主人公はがんがんに犯されたのだ。

——いや、よく考えれば、それなりに吸ったり揉んだりさせてもらうタイミングはあったような気がしないでもないが、あのくらいでは全然足りない。

ゆえに主人公は昨日満足したが、ある意味では飢えている。

シーラとおっぱいプレイがしたくてたまらないのだ。

〈主人公〉

「……………」

こうして主人公がシーラの胸のところに己の頭を持っていき、まだ眠っている乳首を下かられるお、と舐めて。

片方の乳首はそのまま根元からぺろぺろと舐め続け、もう片方は、指先で軽く軽くいじくって、少しずつ硬くさせていると……。小さく、シーラが動いた。

SE2 シーラが身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

●正面 15センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。

小さく、鼻に抜けるような声で、感じている」  
ん……………」

〈主人公〉

「……♡ あー……。おはよお……。♡」

主人公、上下にちろちろと舌を動かしたまま、にやにやと微笑んでシーラに朝の挨拶をする。

シーラはそれをゆっくりと目を開いて確認すると、特に驚く事もなく……。当然のように受け入れる。

二人にとって、これはよくある光景なのだ。

つまり、主人公は大きいおっぱいが好きで、しょっちゅう、こうしている。シーラにすっかり性的嗜好を形成されたからだ。

●正面 15センチ

「※7回※ 呼吸する。

とてもゆっくりと、だが気持ちよさそうな呼吸。

まだ余裕がある。

主人公に乳首を吸われ、転がされ始めたばかりので

はあっ……♡

はあ……。はあ……。はあ……。はあ……。♡

ふーっ……。♡ ふーっ……。♡ ふーっ……。♡

〈主人公〉

「……………」  
♥

主人公、これを受け、さらに熱心に、さらに丁寧に、勃ち上がった乳首を転がしていく。  
根元を円を描くように舐めて、上目遣いでシーラの様子を確認しながら愛撫していく。

● 正面 15センチ

「【※3回※】 小さく喘ぐ。

わずかに漏れ出るような感じで。

主人公に乳首を吸われ、転がされ始めたので」

んっ……………♥  
んっ……………♥

んう……………♥

【※3回※】 高く、小さく喘ぐ。

段々高くなる。

主人公に乳首を吸われ、転がれるのが、とても気持ちいいので」

あ……………♥

ああ……………♥



ん う っ …… ♡

【※6回※ 呼吸する。

ゆ っ く り と、だ が と て も 気 持 ち よ さ そ う な 呼 吸。

だ ん だ ん ゆ っ く り に な る】

は あ。 は あ。 は あ ……。

は あ。 は あ。

は あ …… ♡

【※息づかいのみ※ で表現する。

ゆ っ く り と し た た め 息。

ど う に か 一 度 落 ち 着 け て、会 話 を 始 め た い の で】

……ふう」

※ここからシーラは『乳首を吸われている状態』『耐えられる程度に気持ちいい状態』になる。

『これまでと比較して、すべて一段階ほど気持ちよさそうだな』という感じになる。

●正面 15センチ

「【穏やかに優しく。

夢中で乳首を愛撫している主人公が可愛らしいので」

おはようございます、お嬢様……」

〈主人公〉

「へへ。おはよ……♡」

シーラ、しばらく好きなように主人公に乳首を舐めさせてくれていたが、ここで挨拶を返す。

それから、主人公の髪の毛を優しく撫で、よしよし、よしよしとあやしてくれた。

〈主人公〉

「ふふっ……♡」

それは温かくて気持ちよく、主人公はもう夢見心地だ。  
心のありとあらゆるエネルギーが、一気に充填されていくような気がする。

SE 3 シーラが主人公の髪の毛を撫でる音

【最初から最後まで流す】

【0―2秒ほど流した後、次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

〈主人公〉

「んん……♡

ふふ。シーラすきい……♡」

●正面 15センチ

「【穏やかに優しく。

甘えてくる主人公が可愛くて仕方ないので】  
あら。

ふふ。可愛らしい……♡

朝一番に、シーラのお乳が飲みたくなって仕舞われたのですね」

〈主人公〉

「だめえ……？？」

●正面 15センチ

「【穏やかに優しく。

甘えてくる主人公が可愛くて仕方ないので」  
勿論構いませんよ」

主人公が露骨に媚びて甘えても、今日のシーラは、意地悪を言ったり、焦らしたりはしないようだ。

どうやら、主人公が甘えん坊モードである事を理解してくれているらしい。

●正面 15センチ

「穏やかに優しく。

だが、少しでもわざとらしく、申し訳なさそうに意地悪を言う」

ただ昨夜も、たつぷり差し上げたつもりでしたのに……足りておりませんでしたようで申し訳ございません。

お嬢様は本当に。

【※息づかいのみ※ で表現する。

とても気持ちがいいので。

主人公に乳首を甘噛みされたので】

……っ。

【※3回※ 呼吸する。

うっとりと呼吸が漏れる感じで。

途中、特に気持ちよくて、言葉が詰まる」

はあ、はあ、はあ……♡

甘えるのが大好きなお方でいらっしやる事を。

……♡ 考慮できていなかったようです……♡

〈主人公〉

「……♡」

……そう思っていたら早速意地悪を言われたが、まあいい。

『あれだけでは足りなかった』のも『甘えるのが大好きなお方』であるのも事実なので、まあいい。

主人公は少々むくれつつも、今は反撃として乳首を少々強めに吸ったり、ほんのり甘噛みしたりするのにとどめる。

変わらずなでなでされながらシーラの乳首を口に含み続け、指先で転がし、おっぱいへの悪戯を続けていく。

「※1回※ 小さく喘ぐ。

わずかに漏れ出るような感じで。

とても気持ちがいいので」

んっ……♡

「※10回※ 呼吸する。

とてもゆつくりと。

うっとりと呼吸が漏れる感じで」

はあ……はあ……はあ……はあ……♡

ふー。ふー。ふーっ……。

はあ、はあ。

はあ……はあ……っ♡

「※2回※ 小さく喘ぐ。

わずかに漏れ出るような感じで。

とても気持ちがいいので」

ん……♡ あ……♡

「※3回※ 呼吸する。

うっとりと呼吸が漏れる感じで。

先程までよりも少し苦しそうに」

はあ……♡ はあ……♡ はあ……♡

【※3回※ 小さく喘ぐ。

わずかに漏れ出るような感じで。

とても気持ちがいいので」

あ。あ。あ。

【※息づかいのみ※ で表現する。

ゆっくりとしたため息。

どうにか一度落ち着けて、会話を始めたいので」

ふう……っ。

こんな風に、乳首を甘噛みされてしまう位。

お腹を空かせていらっしやったのですね……♡」

〈主人公〉

「……そうだよ……？ シーラに甘えたくて、待ってたのっ……♡」

もちろん主人公は、お腹を空かせてこうしていた訳ではない。

シーラの胸から母乳は出ないし、もし本当にお腹が空いていたのなら、主人公は自力で何とかするからだ。

それでも、二人はそういう事にして会話を続ける。  
こうしている時、主人公は赤ちやんで、シーラはママだからである。

SE4 シーラが主人公の髪の毛を撫でる音2

【最初から最後まで流す】

【次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

●正面 15センチ

「優しくゆつくと。」

髪を撫でながら話しているイメージで」

よし、よし。

よし、よし。

【とても優しく。

もっと好きなように乳首を吸ってよいと促す。

甘えてくる主人公が可愛くて仕方ないので」

たっぷりお飲み下さいませ。

シーラのお乳は。

生涯、お嬢様だけのものですから……♡



【※息づかいのみ※ で表現する。

とてもゆつくりとしたため息。

とても気持ちがいいので。

主人公がこの言葉を受け、またたつぷりと乳首への愛撫を始めたので】

ふー………♥

【※7回※ 呼吸する。

うつとりと呼吸が漏れる感じで。

だんだん喘ぎ声っぽくなっていく】

はあっ………♥

はあ、はあ、はあ………。

ふう………ふう………。

ふうっ………♥

【※1回※ 高く、小さく喘ぐ。

先程までよりもさらに気持ちよくなってきている】

あ♥  
」

SE5 シーラが主人公の髪の毛を撫でる音3

【最初から最後まで流す】

【次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

〈主人公〉

「……じゃあ♥ もっとしていい……？」

主人公、シーラに撫でられ、たっぷり優しくされ、すっかり赤ちやんがえりしてシーラに甘える。

このひと時は、本当に幸せすぎる。

この通りシーラはちよつと意地悪な恋人であり、主人公のメイドでありボディガードでもあり。また、時に、誰よりも優しいママになってくれる女性だ。

ママモードの時も、少々本来のS気質が隠しきれない感はあるが……シーラに甘えさせてもらう時、主人公は全てを忘れて没頭できる。

それは主人公にとって、無二の時間だ。

外に出たら、主人公はまた似合いもしない『仕事人モード』に戻る。

内心ひいひい言いながら、この仕事が本当に自分に向いているのかわからないまま、必死で業務を進めていかななくてはならない。

その不安を一時的にでも忘れさせ。また、その疲れを癒してくれるこの時間は、主人公にはとても大切なものなのだ。

● 正面 15センチ

「とても優しく。」

もっと好きなように乳首を吸ってよいと促す。

甘えてくる主人公が可愛くて仕方ないので。

主人公の頭を抱きながら話しているイメージで」

ええ……お好きなように、なさって下さいまし。

舐めたり……噛んだり。吸ったり……転がしたり。

シーラの乳首で、沢山遊んで下さいまし。

シーラの身体は、いつでも……♡

お嬢様のお好きな時に。

おもちゃにして良（よ）いのですよ……♡

〈主人公〉

「ふふふ……♡

……あ、でも、そういえば……」

● 正面 15センチ

「とても優しく続きを促す。

主人公が何を話そうとしているのか、見当がつかないので」  
ん……？」

……だが、こんな時でも、赤ちゃんになり切れないのが主人公だ。

主人公は後頭部と首の境目をなでなでされてふにやふにやになり、子どものようにくすくすと笑った次の瞬間、ある事を思い出す。

『昨日は家に一度連絡を入れるのを、すっかり忘れていた』という事だ。

むろんそれは、ひたすらシーラとの行為に及んでいたせいである。

主人公はふだん、メイドたちには報連相を徹底させている。

それなのに、主たる自分がこれとはいかがなものなのか。

ゆえに主人公は、このまま甘え続けたいのをぐっとこらえて、シーラに尋ねた。

〈主人公〉

「うちに連絡って、した……？」

● 正面 15センチ

「『ああ、その件か』という感じで。

主人公の質問に、丁寧に答えていく。

『留守番している者』とは、主人公宅にいる他のメイドの事。

『お休みになっている間』とは『寝ている間』という意味」

……ええ……♡

その辺りは……っ、抜かりなく♡

留守番している者には……昨夜、お嬢様がお休みになっている際に。

【※息づかいのみ※ で表現する。

とてもゆっくりとしたため息。

どうにか一度落ち着けて、会話を始めたいので」

ふー……♡

連絡を取りました……♡」

するとシーラは、当然のように模範解答をくれる。

やはり、持つべきものは優秀な恋人兼メイドだ。

恋人兼主が多少抜けていても、それを補ってくれる。

〈主人公〉

「おー……。さっすがあ。頼りになるう……。♡」

※ここからシーラはしばらく『やや気持ちよさそうではあるが、おおむね通常通りの話し方』になる。

会話するため、主人公による愛撫の手が弱まったので。

●正面 15センチ

「『ここからしばらく『やや気持ちよさそうではあるが、おおむね通常通り』の話し方になる。」

会話によって、主人公による愛撫の手が弱まったので」

ありがとうございます。

家の方は……特に問題ないようです。

しかし……連絡事項がございました」

〈主人公〉

「お？ ……なに？」

●正面 15センチ

「『やや気持ちよさそうではあるが、おおむね通常通り』の話し方で。」

会話によって、主人公による愛撫の手が弱まったので。

『志保』とは、主人公の屋敷で働くメイドの一人で、シーラと同僚の事」  
何（なん）でも。

志保（しほ）が、今の業務に関係する、よい勉強会を見つけたらしく……♡  
急ではございますが……。

『お嬢様さえよろしければ、ぜひ参加してみたい』と言っておりました……♡  
」

〈主人公〉

「へえ……！　いつ？」

そんなシーラがくれたのは、家を守っているメイドたちに関する情報だ。

主人公としては、もちろん大歓迎だ。

自分から勉強して、自分から成長してくれる従業員なんて最高である。

もし仮に業務とそこまで関連していなかったとしても、その姿勢がありがたい。  
よっぽどおかしなものでもない限りは、主人公は喜んでOKするだろう。

● 正面 15センチ

「『やや気持ちよさそうではあるが、おおむね通常通り』の話し方で。」

会話によって、主人公による愛撫の手が弱まったので」  
時期は、来週だそうです……♡  
ひとまず『お嬢様に確認する』と伝えておきました」

〈主人公〉

「おー。ありがとう……！」

でも、いいねいいね♡ そういの。  
全然行っているよお……。

ほんと、うちのメイドたちは、みんな勉強熱心で助かるわあ。  
てか、わたしの許可なんて取らなくても、自由にしていいのにな

● 正面 15センチ

「『やや気持ちよさそうではあるが、おおむね通常通り』の話し方で。  
会話によって、主人公による愛撫の手が弱まったので。  
自分なりの考えを述べる。

シーラは『自分が志保でも、同じ選択をするだろう』と思っているので」  
ふふ。

そうはいかないのでしよう……♡



志保は生真面目な性格ですから」

〈主人公〉

「ふーん……？」

……そういうものなんだろうか。

まあ、わからないでもない？ けど……。

主人公、シーラの言葉に首を傾げつつも頷き、また、くりくりとシーラの乳首を転がし始める。

どうやら連絡事項はこれ位のようなのだ。

これなら、えっちモードを再開してもよさそうだな……。と、判断したのだ。

※ここからシーラは再び『乳首を愛撫されている状態』『耐えられる程度に気持ちいい状態』になる。

『これまでと比較して、すべて一段階ほど気持ちよさそうだな』という感じになる。

この後、もう一段階この傾向が強くなる。

● 正面 15センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。

とても気持ちよさそうなため息」

……はあっ。

「ここからまた『愛撫されて気持ちよさそう』な感じに戻る。

主人公の愛撫が再開したので」

メイドとして、貴方様が許可された事をしたいのです……♡」

〈主人公〉

「へえ。それは、シーラも？」

だから、主人公は質問してみた。

たとえばこのまま主人公が、さらなるいやらしい要求をしても。シーラは応えてくれるのだろうか。今日こそは、主人公に攻めさせてくれるのだろうか。そこらへんを確かめておきたかったのだ。

● 正面 15センチ

「【少し不思議そうに。

主人公が奇妙な質問をしたので」

ん……？

【穏やかに優しく。

すぐに主人公の意図を理解したので。

つまり、このまま手を打たずにいると、このまま自分が攻められそうだと理解したので。

だが、それはなんだか申し訳ない。

なので、自分が攻める方向に話を持っていく」

ええ、勿論。

勿論、私（わたくし）もです………♥

お嬢様がお望みになり、お嬢様がお喜びになる事だけを。

したいと思っています………♥」

〈主人公〉

「へえ………♥」

SE 6 シーラが身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

主人公、この言葉を受け、乳首を舐めたままシーラの下半身に手を伸ばそうとする。  
だがシーラは、ここでふと主人公の髪を撫でると……。

自分に覆いかぶさっていた主人公を、そつと隣に寝かせる。

それから主人公の額にキスして、このような事を提案してきた。

●正面 【※5センチほど上※】 0センチ

「【※1回※】 キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス。

主人公の額にキスしている」

ちゅ♡」

シーラ、正面の位置でささやく。

★正面 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと、そつと、優しく。

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで」

例えば……お嬢様。

このような事は、いかがでしょうか」※

〈主人公〉

「へ……?」

●正面 【※5センチほど上※】 0センチ

「【※1回※】キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス。

主人公の額にキスしている」

ちゅ♡

これは、主人公にとっても予想外だ。

主人公、事態がよくのみ込めないままきょんとしていると、また額にキスをされる。そのまま……このような事も提案をされた。

シーラ、正面の位置でささやく。

至近距離で正面から見つめながらささやいているイメージ。

★正面 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『ひそひそと、そつと、優しく。』

だけでも少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。

『自分に膝枕された上で、ガニ股ポーズになれ』という意味で言っている」  
お嬢様。もっと気持ちいい体制になりましたよう。

一度起き上がり、私（わたくし）の膝に頭を乗せ。

足を開いて、蟹さんのような形にお股を広げて下さいませ……♡」※

〈主人公〉

「え………？ 蟹さんってさあ………♡」

主人公、渋るふりをしながら、にやにやとシーラを見上げる。

またも攻めさせてもらえなさそうなのは非常に残念だが、つまり、シーラはこれから、主人公に授乳クリいじりをしてくれるという事だろう。

それはあまりにも魅力的な提案だ。

主人公は完全に、のる流れになっている。

★正面  
ささやき  
0センチ  
※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、そつと、優しく。」

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで」

そうです、蟹さんです。

昨日寝てしまった時のままの、この、裸の状態で。

とっても恥ずかしいガニ股のポーズになって。

その格好で、お乳を吸いながら……本月初（はつ）イキをして頂きたいのです。

【ひとときわ優しく。

ダメ押しする感じで

きつと……とつても気持ちがいいですよ……  
 ♡  
 」 ※※

## 主人公

「.....」  
「.....」

♡

まあ……いいよお……？

シーラが、どうしてもしたい事みたいだし……？」

SE7 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

主人公、言いながら、あくまでも『仕方ないなあ』という感じで身体を動かし、従い始める。

本当は、何も仕方なくない。ものすごく、したくなっている。  
シーラもそれを把握済みだろう。

ゆるんだ頬を隠しきれない様子で、満足げに見下ろしてくる。

こうして主人公はこれから、また、めちやくちやに気持ちよくされるだろう。  
想定をはるかに超える快感で攻め込まれて、たくさん痴態を晒すだろう。  
そうなるとわかっていて、今日も罠にかかりに行くのだ。

主人公とシーラの距離は、主人公が動いた事によって、少しだけ離れる。

● 正面 15センチ

「【穏やかに、とても嬉しそうに。

主人公が従順に誘いに乗ってきたので】

ふふ……♡

可愛らしい。



今日は、大変素直でおられますね……♡」

〈主人公〉

「ふふ♡」

主人公とシーラ、一度離れて、ベッドで主人公は仰向けに、シーラは横向きになって見つめ合っている状態になる。

そんな中、シーラが近づいてささやく。

これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

★左 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『穏やかに、優しく。』

優しい声でえっちな事を言って、主人公の興奮を高めようとしている」  
そうですね……お嬢様は。

『おっぱいを吸いながらおまんこさすられるのは、とっても気持ちいい』と知った時から。

これなしではいられない身体になって仕舞われましたものね……♡」※

〈主人公〉

「もお……♡」

SE8 主人公が身体を動かす音2

【最初から最後まで流す】

主人公、照れているふりをしながら素直にシーラに身を任せて本格的に動き出し、裸のままシーラに膝枕をされていく。

ここからシーラの声が、上から聞こえるようになる。

●正面 【※50センチほど上※】 30センチ

「【穏やかに優しく。】

主人公に、膝枕されるように促す】

さあ、こちらへ」

〈主人公〉

「ん……♡」

SE9 主人公が身体を動かす音3

【最初から最後まで流す】

●正面 【※50センチほど上※】 30センチ

「穏やかに優しく。」

主人公に、再び乳首を吸うように促す」

こうして、お顔を近づけて。

シーラの乳首を、もう一度お召し上がりになって下さいませ……♡」

シーラ、少し身体が近づく。

こうして主人公は、全裸でガニ股になり、頭をシーラに抱かれて、『授乳クリいじり』を  
してもらう状況になる。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「※1回※ 小さく喘ぐ。」

わずかに漏れ出るような感じで。

とても気持ちよさそうに。

主人公が再び乳首を吸い始めたので」

ん……♡

【※6回※ 呼吸する。

うっとり、とても気持ちよさそうに】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、ふう……♡

【※息づかいのみ※ で表現する。

ゆっくりと息を吐く。

うっとり、とても気持ちよさそうに】

はあ……♡

【うっとり、嬉しそうに。

シーラは、主人公をこうして甘やかすのがとても好きなので。

『ちゅっちゅ』とは『乳首を吸う』という意味】

お嬢様のお口、温かい……♡

ふう……本当に……ちゅっちゅがお上手ですね……」

SE10 シーラが主人公の股間に触れる音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—1秒ほどまで流したのち、次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

【▲1でSE11と切り替わる】

〈主人公〉

「ああ……っ♡」

● 正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「うつとりと、嬉しそうに。」

主人公の股間に触れた所、たつぷりと濡れていたのだ」

こちらも……♡

ああ……やはり、たつぷり濡れてしまわれている。

可愛い……♡

この可愛いお股を」

シーラ、言いながら、主人公の股間を本格的に愛撫し始める。

『ガニ股』を命じられた主人公は、足を閉じる事もできず、そのまま、シーラにとって

とても触りやすい体制で、クリトリスをいじられていく。

▲1 ここでS E 1 0と1 1が切り替わる。

S E 1 1 シーラが主人公の股間に触れる音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0—1秒ほどまで流したのち、次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

【▲2 で一段階速度が速くなる】

【▲3 で、さらにもう一段階速度が速くなる】

【▲4 でフェードアウトする】

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「うっ」とりと、嬉しそうに。

シーラは、主人公をこうして甘やかすのがとても好きなので。

『くちゅくちゅ』とは『愛撫』。

『すつきり』とは『イって気分をすつきりさせる』という意味】

今日もくちゅくちゅ、くちゅくちゅして。

沢山すつきり致しましょうね。

【少しだけ真面目なトーンになって。

ややゆっくりめに。

優しく、主人公の努力について述べ、それに対する自分の想いを伝える。

その位、シーラは主人公を尊敬し、また感謝しているので」

お嬢様は……毎日とても頑張っておられますから」

〈主人公〉

「ん……っ……？」

だがここでふと、シーラの声音が真面目なものになった。

これに気づいた主人公は、快楽に落とされながらも気になって、乳首を楽しむ手と口を止める。

確かに、それなりに真面目にやっている自覚はある。

だが、改めてそう言われるとは思わなかった。

なぜなら、特にこれといった事がなくても、シーラは毎日のようにいたわってくれる。

だから、彼女の気持ちは十分主人公に伝わっていて、特に話題にする事もないだろうと思っていたのだが……。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【少しでも真面目なトーンになって。

ややゆっくりめに。

優しく、主人公の努力について述べ、それに対する自分の想いを伝える。

その位、シーラは主人公を尊敬し、また感謝しているので」

毎日、お家（いえ）の為に。

私（わたくし）達、従者の為に。

そして……私（わたくし）との未来の為に。

本当に……頑張っておられますから……。

【とても優しく。

ややゆっくりめに。

そんな主人公の努力を最も近くで見ているからこそ、自分がしたい事を述べる。

シーラはたとえこの先主人公とどのような関係になろうとも、変わらず支え続けたい、守りたいと思っているので」

ですから、せめて、私（わたくし）にだけは。

いつでも好きな時に、好きなように甘えて。

頼って欲しいのです。



私（わたくし）は、いつでも、いつまでもお支えします。

貴方様の存在こそが、私（わたくし）の生きる意味なのですから……」

〈主人公〉

「シーラ……」

だから主人公は、思わず反応が遅れた。

主人公はいつもとにかくおしゃべりで、元気が有り余っている。

だから、こういった予想外の事態においても、ぼんぼん言葉が出てきてほしい。

主人公自身、常々そう思っているのだがそうはいかず、ただ、名前を呼ぶのにとどまる。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【少しだけ涙ぐんで。

つい、色んな事を考えてしまったので。

シーラは主人公にばかり負担させる現状に対しても、自分達の関係は本当に認められるのだろうかという事に対しても、申し訳なさや、不安を感じてしまう事がある。

主人公は『自分はシーラに甘えっぱなしだ。この関係はシーラの負担が大きすぎる』と感じている。

だが、実はシーラも、同じように考えているのである」  
……っ。

「なんとか持ち直して、気を取り直す感じで。

このままでは、主人公に幸せな時間を過ごしてもらえないので」  
……ほら」

▲2 ここでSE11の速度が一段階早くなる。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「少し甘ったるく。

誤魔化すように、わざとえっちな言い方をして煽る。

実際は、まだ完全に元のテンションには戻っていない」

くちゅ、くちゅ。くちゅ。

くちゅ、くちゅ、くちゅ ♡

気持ちいいですね……♡」

〈主人公〉

「あ……♡ あ♡ あ♡ いいっ……♡

いいっ……♡ いいよお……♡ 気持ちいいっ……♡」

その上ここで、シーラの指の動きが一気に容赦なくなった。

短時間で、無慈悲に主人公をイカせる方針らしい。

主人公の身体には、ゆっくり指を往復させ、ねっちりとさすられて快感を堪能する瞬間と、寸分の狂いもなく最短ルートを辿られて強い快感に悶える瞬間が、交互に与えられる。それが主人公の心を、何も考えられなくさせる程侵食していく。

● 正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【大分持ち直して。

優しい声で意地悪を言う。

主人公が乳首を吸うのを忘れがちになっているので」

おや……いくら気持ちがいいからって。

ちゅっちゅをやめてはいけませんよ」

〈主人公〉

「んんんうっ♡ んー♡ んー♡  
ふーっ♡ ふーっ……♡ ふーっ……♡」

シーラ、主人公の頭を優しく自分の胸に押し付けると、授乳プレイに集中させ、言葉も発せないようにさせる。

結果、主人公はシーラの異変に気付きつつも、それについて尋ねる間もない程の快樂に、押し流されていく。

シーラはそれを……目を細め、嬉しそうに眺めている。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【完全に持ち直して。

優しい声で意地悪を言う。

また、優しく主人公の状況を『実況』してあげる事で、主人公の快感を高めようとしている」

ふふ……蟹さんのポーズは、気持ちいいですね。

ほおら……♥ クリトリスさんを、もっと気持ちよくしましょうね。

こうやって、お嬢様の可愛い愛液をたっぷり塗って。

こしこし、こしこし、こしこしと擦って差し上げますから。

【とても気持ちよくて、言葉に詰まる。

主人公を授乳に集中させた事で、自分の胸への愛撫が強まってきたので】

……っ♡」

※ここからシーラは再び『乳首を吸われている状態』『耐えるのが少し大変な位、気持ちいい状態』になる。

『これまでと比較して、すべて二段階ほど気持ちよさそうだな』という感じになる。かなり気持ちがいい状態。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【とても気持ちよくて、話すのも難しくなってくる。

それでも主人公の快感を優先して、絶頂を促していく】

お嬢様は。

私（わたくし）のお乳をっ……♡

たっぷりお吸いになりながら。

身体をのけぞらせて、もっと足を開いて。

一番感じる格好になって……♡

気持ちよく。たっぷりと……っ♡

お好きな時に。

イって。よろしいですよ……♡」

〈主人公〉

「あ……♡ やば……♡ シーラ、やばっ……♡」

かくして、今日最初の絶頂が近づいてくる。

主人公の頭は『気持ちいい』『もっと気持ちよくなりたい』『イきたい』『シーラに今日もイかせてもらいたい』以外の事が考えられなくなるほどシーラに犯され、もう、彼女の手  
に、されるがままになっている。

● 正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【とても気持ちよくて、話すのも難しくなってくる。

それでも主人公の快感を優先して、絶頂を促していく】

ええ……っ♡

いつでも。お嬢様のお好きな時に。お好きなように……♡

私（わたくし）の指に、おまんこを押しつけて、擦り付けて。

イきましよう……♡」

▲ 3 ここでSE11の速度が、もう一段階早くなる。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【※9回※】呼吸する。

少し早く、荒く呼吸。

うっとり、とても気持ちよさそうに」

はあ、はあ。

はあ。はあ。はあ

はあ、はあ、はあ。はあっ

〈主人公〉

「あー……っ ♡ あ ♡ あ ♡ あーっ…… ♡

イク ♡ イクイクイク ♡ イクイクイクっ ♡」

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「うっとり嬉しそうに。

とても気持ちよくて、話すのも難しくなってくる。

それでも主人公の快感を優先して、絶頂を促していく。

主人公がシーラの手で絶頂してくれる事は、シーラにとって何よりの喜びなので」

ええ……イきましよう？

【※6回※ 呼吸する。

少し早く、荒く呼吸。

うっとり、とても気持ちよさそうに】

はあ、はあ。はあ♥

はあ、はあ、はあ♥♥

【少しだけ早口に。

余裕なさそうに。

自分もとても気持ちがいいので】

どうぞ……どうぞ……っ♥

イって。イって。イって。

イって下さいませ……♥

【※9回※ 呼吸する。

少し早く、荒く呼吸。

だんだん荒くなっていく】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあ。

ふーっ、ふーっ。



ふーっ……。

〈主人公〉

「あああああ……っ♡」

● 正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【※ここで主人公が絶頂する※】

少し驚きつつ、自分も気持ちいい、という感じで。

絶頂ポイントであることを、比較的わかりやすく表現していただく」

あ………！」

▲ 4 ここでSE11がフェードアウトする。

〈主人公〉

「はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡

はあ……っ♡ はあっ……♡ はあっ……♡

SE12 シーラが主人公の髪の毛を撫でる音3

【最初から最後まで流す】

【次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

達したばかりの主人公の髪の毛を、シーラが優しく撫でてくれる。  
自分もまるで余裕なさそうなのに、主人公を優先して、守ってくれる。

●正面 【※50センチほど上※】 15センチ

「【※11回※】 呼吸する。

少し早く、荒く呼吸。

うっとり、とても気持ちよさそうに。

だんだんゆっくりになる。

主人公の髪の毛を撫でながら、呼吸を整えている】

ふー。ふー。ふー……。

ふう、ふう。ふう。ふーっ……♡

はあ。はあ、はああ。

ふううっ……♡  
」

ゆえに主人公は、今日もこの心地よさに負けた。

自分とシーラは万事順調であり、二人の気持ちは一つだと思い込んだ。

主人公にはそういうところがある。

小説のキャラクターでも、目の前の恋人でも……お気に入りの存在に思い入れを強めるあまり、自分と対象の境が、少々あいまいになってしまうのだ。

そんな主人公を、シーラが優しく抱き起こす。

主人公はまた対面座位の格好で膝抱っこされている形になり……引き続き、シーラからたつぷりと愛を受ける。

SE13 シーラが主人公を抱き起す音

【最初から最後まで流す】

これによって声の聞こえ方が大きく変わり、『正面のほんの少し上』になる。

● 正面 【※5センチほど上※】 0センチ

「【※1回※】キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス。

主人公の額にキスしている」

ちゅ♡

【優しくあやすように。

また、先ほどの涙をごまかすように。

イってぐったりしている主人公が、とても可愛らしいので。

また、自分の涙も、さほど大きな問題ではないので」

今日もとっても……気持ちよくなれましたね。

とても可愛らしかったです……♡

お慕いしておりますよ……お嬢様♡

【※1回※ キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス。

主人公の額にキスしている」

ちゅ♡

ここでフェードアウトして終了。